自分史と自由 (2)

小樽市医師会
木下病院　小川　亢一

プラトンとハイデッガー

私の哲学志向は、人はいかによく生きるべきかという道徳的倫理的視点から出発したが、ここへきて、今や価値論とは中立の立場で人間存在そのものをどう考えるかに視点が移り、E．フッサールの精神現象学やM．ハイデッガーの実存哲学に関心を抱くようになった。そして、2人の学説を応用した現存在分析的、現象学的推論を加えたL．ビンスワンガーを苦吟しながら再読を繰り返している。

なぜ、今この齢になってハイデッガーなのか、精神医学への関心がその発端であることは確かだが「存在と時間」を読んでいるうちに、その論述がかなりの部分、私の内心の軌跡に符合していることが分かってきた。

当時私は、「生き方の問題」でプラトンの対話篇「パルメニデス」を恣意的に戯れのつもりで解釈し、人の一生を考えてその出生を有の非有とし、死を非有の有とした。この場合、前段の有と後段の非有を肉体、前段の非有と後段の有を精神に置き換えてもよい。人は生きている間は自分の死を経験できないし、死んだ後にはそれを経験できる自分はいない、というのがエピクロスをはじめ多くのギリシャ古哲が語ってきたことである。非有の有を霊魂に置き換えれば、プラトンの霊魂不死説を説明できるとの考えであった。

人は仕事や遊び（非本来性＝日常性）に没頭しても、何かのきっかけでふと立ち止まって我に返り、自分の行動していることの意味を問う（本来性への可能性の目覚め＝非日常性）ことがある。が、それを自覚し覚悟した自分は間もなく日常性に復帰、頽落（フェルファーレン）するが、その時の自分はもう元の自分ではなく、ひと皮むけた存在になっている。

ハイデッガーのこの考え方で、非本来性をわたしの後段の非有、本来性をその有に置き換えれば、私の有と非有の交代は生涯の多くの時期で繰り返されていることになる。これが脱皮だとすれば、哲学趣味の私は無自覚のまま脱皮を頻繁に繰り返していたことになる。しかし、社会生活という日常性への頽落に復帰するためには生活本能に根ざしたエネルギーが必要で、これが生の躍動（エラン　ヴィタル）の役割なのだろう。精神病者はそれが何らかの理由で衰え、そこから抜け出すことができないので、日常性に復帰するのが難しい。

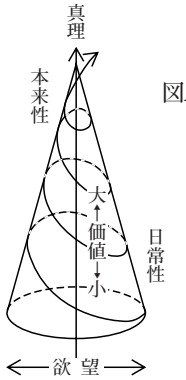
生き方の問題

“人はなぜ生きるのか”の問いは、自己の本来性に目覚める大切な動機ではあるが、同時にそれは自己破壊をもたらす危険性を孕む諸刃の剣である。この問いを出したところで答えは返ってこないからである。無理に問い詰めると、逆に客観的な死の壁が迫ってくるだけである。

若くて人生が順風満帆なとき、この問いかけは無用だが、驕りを押えて足元を見つめ直し次の飛躍に備えるには有効である。しかし、生が行き詰ったときのこの問いはそれを乗り越えるだけの生命力がなければ有害となる。

これが老年期となるともう先がない。仕事を失い身体の自由を失ってもなお生命力に充ちているような極限状態に備え、自分を鍛えるにはどうすればよいのか。人間は自殺を除いて死に方を選ぶ自由を持たないが死に向かって生き方を選ぶ自由

はある。自己にとっての主観的な死は存在しないのだから、自我を超越（世界内＝存在）する努力の中でそれは成就できないものか。本来性へと日常性への交互復帰を循環させる行為の中で、夾雑物を排除し最小限の最大価値を得て、安らぎの心で死に対面する状況を作れないものか。円錐形の側面の一方を本来性・他方を日常性として、一方の底辺から螺旋状に側面を廻旋し、先端の真理を志向する図形を心像に結んだりしながらも迷いの霧はなお深い。(図A)



図A

そんな極限状態はさておいて、ごく普通の老年期はどう迎えよう。かつて登山口を探して山野をさまよっていた頃、人格的躍動で支えられていた頃の重装備は山頂直下に立ちはだかる絶壁の前にはもはや無用の長物、超越への飛翔には邪魔になるだけのこと、時代の変化を認識できないと老害や濡れ落ち葉として社会や家庭から疎外され老人性精神病の諸原因を作る羽目となる。しかし、何もかも捨てて生命的接触力まで失うと壁から墜落する。落ちたところには宝物はない。

自分にとってのっぴきならない大切な部分だけを残そうとする行為によって、形成される自我を濃縮していけば、その周辺を囲む比較的どうでもよい多くのことは容易に他人との共有や妥協、譲ることや無関与、撤退あるいは放棄ができるから社会的接触の空間は広がる。その柔軟な空間こそ生の躍動の場であり、個人にとって自由の境地を成就する場ともなるのではないか。

現況

これらのことをわが身に振り返ってみると、70年も人間をやっていると大概のことは飽きてどうでもよいことが多いので、わりと捨て方は容易だが、それでもそれなりの努力はしている。

昭和50年代の私たち世代の最盛期を支えてくれた当時の高金利も今は昔、アクロバット的マネーギャンブルに仮に成功したにせよ、その果実は相続税で政府にとられるだけと割り切ることにして新聞の株式欄を横目で睨んでいる。

手元におきたい音楽はバッハ、モーツアルト、ベートーベンのCD全集にとどめ、目ぼしいオペラの収録はほぼ完了しているので演奏会場から足を遠ざけ、海外音楽祭のための旅行も止めた。今は深夜のラジオ放送で往時の流行り歌を聞きながら自分の年代記を刻んでいる。

これとは逆に人間に対する好奇心は年とともに深まり、それが今の私の山頂にたどり着くためのエネルギーになっているようだ。

私の現役引退後の人的交流は、飲食主体の社交を避け、また、友人・知己との死別もあって大幅に縮小しているが、逆に読書を通しての人間理解は質的にかなり深められてきていると思う。そして、このような私生活の矮小化を補うものとして私には歴史書がある。少年時代、吉川英治の歴史小説に目がなかったから、なんで今、司馬遼太郎ブームかと鼻白むのだが、トインビーやウェーバーの社会科学手法で歴史書に対する認識を改めてから、小説を離れ、史家による正統な史書に親しむようになった。モロア、ランケ、ギボン、ブルクハルト、ヨセフス、タキトウス、スエトニウス、アッリアノス、ツキュディデスなど時代を遡り、また、マキァベリやプルタルコスの個人的症例報告も含めて、とうとうヘロドトスの「歴史」にまでいってしまった。

飛躍的に増えた自由時間に対する私の読書時間は必ずしも増えているわけではない。ただ、読み方は著しく変わった。一言一句を吟味し、ちょうど、絶壁をよじ登りながら足元を確かめるように精神力を集中する。その間、言葉の意味を読み取ろうとする私だけの孤独な世界に引き込まれる。この時間は長続きせず間もなく現実に戻るが、そのあとの開放感が心地よく、むしろ、この感覚を味わう時間の方が長くなった。そして、この間に私を訪れる奇妙な体験は、私の過去と現在を隔てる二つの点が読書体験を通して一つの線につながってくるということである。吉川英治とヘロドトスはただの歴史好きで片付けるにしても、プラトンとハイデッガーがパルメニデスを介して、ベルクソンの生の躍動がミンコフスキーにつながって

現在が開かれてくることの不思議さである。

この体験は私が医業廃止を前にして小樽医師だよりに発表した感想「転業」で、私が感動した「イデアとエスカトン」の著者・佐々木斐史氏が、若い頃読んだロマン・ローランの「ベートーヴェン研究」の訳者であったことの不思議な一致として書いた。

私が何か大きな力に支配され導かれているような神秘的な体験である。距った２つの時間と空間が重なることで、私自身が消え去って歴史の中に同化してしまうという感覚である。

出来事の中で生起しながら人間が初めて存在者として歴史の中へ踏み入り現象し、みずから存在へと到来する。人間の自己性とは人間が人間に対して自己を開示する存在を歴史へと変身させるべきであり、その歴史の中で人間自身を立つことへともたらすべきである。とは、ハイデッガーの「形而上学人間」の中でパルメニデスの教説詩を解説する部分の一節である。（平凡社ライブラリー、川原栄峰訳）

過去の経験が内的時間意識に組み込まれた記憶としてよみがえり、それが時熟して現前化するためには、その着地点が求められる。世界内＝存在としての自己がその存在を開示してそれを受け取るには開示する対象が必要で、それが頽落していく世俗世界であり、人里離れた隠居生活ではない。着地点のないところに価値は存在しないのである。いつまでも蝉のように壁にへばりついていては干からびてしまう。しかし、それでも、せめて名誉とか肩書とか権威とか、装飾の通用しない着地点が欲しい。

私が現在、毎月定期的な関わり合いを持っているのは花園医会とライオンズクラブだが、それが私の居心地の良い着地点であってほしいと思う。

かつて私の１日を支配した「ニーベルングの指輪」は、その役割を終え、レコード棚の片隅にひっそりと収まっている。代わって今、私の心の奥底にかすかにではあるが、着実に確かな足どりで鳴り響いてくるのはヴェルディの「ナブッコ」、「行けわが思い、金色の翼に乗って」の旋律である。近づきつつある次のイニシエーションの予兆であろうか。

参考文献

M.ハイデッカー：存在と時間 上下、形而上学入門、ニーチェⅠ.Ⅱ(平凡社ライブラリー)
：ヒューマニズムについて(ちくま学芸文庫)
M.ゲルヴェン：「存在と時間」註解(ちくま学芸文庫)
L.ビンスワンガー：現象学的人間学、うつ病と躁病、妄想。思い上がり・ひねくれ・わざとらしさ。夢と実存(みすず書房)
E.ミンコフスキー：生きられる時間1,2、精神分裂病(みすず書房)
E.フッサール：現象学の理念(みすず書房)
M.ラントマン：哲学的人間学(思索社)
木村　敏：時間と自己(中公新書)
木田　元：ハイデガーの思想(岩波新書)
M.フーコー：精神疾患とパーソナリティ(ちくま学芸文庫)

人名は難しい その7：P.Pottについて

小樽市医師会
澁谷整形外科クリニック　澁谷　昭雄

Ⅰ．P.Pottの出自

P.Pottは、LondonのEast End地区（Thredneedle Street）生まれの、ロンドン子Cockneyである。[1]

父親は、青果物商であったが、大層な子だくさんなため、友人たちは、「London一のPottmakerだ」と冗談の種にした由。[1]

そのような状況のためか、出生は多くが1714年としているが、一部に1713年の記載がある。[2,3]何れも正確な月日の記述はない。

Der Barbier, Holzschnitt von Jost Amman aus „Beschreibung aller Stände" von Hans Sachs (Frankfurt 1568).

（図：1）

Ⅱ．経歴（1714～1788.12.22）

彼は、少年の頃から、St.Bartholomew病院のある外科医の従弟Lehrling（apprentice）（註：1）になった。[1,8]

（註：1）従弟制度[4,5,6]

当時、（床屋）外科医になるためには、〔ドイツを例にとると〕、手数料と教授料の半額を納めて、親方と契約する。

数年（2～4年[4]、7年[6]、8年[5]）におよぶ住み込み従弟修業の後、職人試験Gesellenprüfungを受ける。これに受かって、教授料の残額を支払い、Zunft（guild）集会で、親方が宣言し、従弟修了証書Lehrbrief（diploma）が授与される。ここで親方候補（職人）Gesell（Journeyman）になる。[2]

その後は、引き続き留まって修業を続けるか、各地を遍歴するか、あるいは軍医となって戦地に赴き、戦傷者の治療をして実地の技術を磨いた。[4]

やがて医師団の前で、親方昇進試験Meisterprüfungを受ける。これに合格すると、晴れて親方Meister（master）として独立営業権を得る。[4]そして理髪師兼外科医Barbier（Barber－surgeon）と呼ばれた。[5]

（図：1、2）は、床屋外科の仕事の模様を示した。[5]（図：1）の下部に宣伝文句が彫られて

Inneres einer Barbierstube, Kupferstich von de Bry um 1600.

（図：2）

いる。当時の状況がよく分かって面白いので、拙訳ながら、ご紹介したい。

『某は　國中到所で、生業致す資格がござる。効目灼な膏薬を、しこたま作り得まする。眞新しい創を、神の恩寵の下に治すでござらう。脚の骨折れや古傷も、然りでございる。
フランス病を癒し、底翳も手術し仕らん。壞疽をはだえ柔かに仕上げ、いかれた歯は抜き取りまする。もとより「ひげ」剃り、髪刈り、素敵な髪型に整えるのは、お手のもの。更には、お客人の瀉血も喜んで仕りまする。』
フランス病＝梅毒

P.Pottは1936年、理髪外科組合Barber Surgeon's CompanyからGrand Diploma(Lehrbrief？)を得た。さらに8年の研修後、1744年から病院の正職員（外科医資格取得？）になった。多数の業績をあげ、英国を代表する外科医となり、死亡の前年まで同病院に勤めた。

Ⅲ．P.Pottの名前について

P.Pottのpersonal（given）nameは、Percivall[1,2,9,10,11,12,13,14]と、Percival[3,7,8,15,16,17,18,19,20,21,22]の2種類がある。何れも相当数の文献に使用されている。

語源を調べると、[23]「アーサー王伝説」[24]legendary King Arthurs, Artussageの、「円卓の騎士」The Knights of the Round Table,Artusrunde,Tafelrundeの中でも有名な、「聖杯の騎士」Percival, Perceval, Pércivale, Parzival, Parsifalの名前からきていると言う。[23]

Richard Wagner（1813～1883）の舞台聖祝劇BühnenweihfestspielのParsifalやLohengrin（Parsifalの息子）に出る名前も、すべて語尾のlは1つである。[25]

family nameに関しては、例えば英国首相であったSpencer Perceval（1762～1812）の語尾のlも1つである。[24]

このようなことから筆者は、Percival Pottの方が妥当性があると考えている。

Ⅳ．P.Pottの業績について

P.Pottは、多数の論文を発表しているが、煙突掃除人の職業病としての陰嚢癌[19]、結核性脊椎炎、下腿骨々折などの業績が有名である[1,3,7,8,19]。
Eponymには、[3]

1）P.*Aneurysma＝動静脈性動脈瘤
2）P.*Asthma＝胸腺性喘息(Asthma thymicum)
3）P.*Buckel＝結核性脊椎炎による亀背
4）P.*Gangrän＝動脈硬化性老人性壊死
5）P.*Karies,Krankheit,Übel＝結核性脊椎炎
6）P.*Lähmung＝結核性脊椎炎による対麻痺
7）P.*Trias＝結核性脊椎炎の3大後発症状（亀背、膿瘍形成、麻痺）
8）P.*Tumor＝骨炎または硬膜下膿瘍に伴う頭蓋軟部腫脹（硬膜外出血、皺裂骨折でも併発する）
9）P.*Fraktur＝次回に述べる。
10）P.*Messer＝同上

などがある。

結論

P.Pottのpersonal nameは、percivalの方が正しいと考えている。

付図出典

（図：1）(文献：5）と同じ
（図：2）同上

文献

1．Mercer Rang ; Anthology of Orthopaedics.(Churchill−Livingstone,1966)
2．Churchill's Medical Dictionary.(Churchill−Livingstone,1989)
3．Günter Thiele : Handlexikon der Medizin.(Urban−Schwarzenberg,1980)
4．Ernst Consentius : 佐藤正樹訳.ヨーハン・ディーツ親方自伝.(白水社・2001)
5．Eike Pies : Ich bin der Doktor Eisenbarth.(JF LEHMANNS,1995)
6．Noah Gordon : Der Medicus.(Droemer Knaur,1987)
7．Edgar M.Bick : Classics of Orthopaedics.(J.B.Lippincott,1976)
8．David Le Vay : The History of Orthopaedics.(Par-

thenon Pub.Group,1990)
9. Edited by David Crystal : The Cambridge Biographical Encyclopedia. (Cambridge University Press.2000)
10. J.Grant Bonnin.Injuries to the Ankle. (William-Heinemann,1950)
11. ステッドマン医学大辞典・第5版(メジカル・ビュー社・2002)
12. Doland's Medical Dictionary.(W.B.Saunders,1988)
13. 林 浩一郎 : 整形外科三世紀の光芒.(南江堂・1982)
14. Geoge Guman : Foot and Ankle Trauma. (Churchill-Livingstone,1989)
15. H.Kilikian et al. : Disorders of the Ankle. (W.B. Saunders,1985)
16. William C.Hamilton : Traumatic Disorders of the Ankle.(Springer,1984)
17. Bruno Valentin : Geschichte der Orthopädie. (G. Thieme,1961)
18. Butterworth's Medical Dictionary. 9 (Butterworth,1978)
19. 岩波西洋人名辞典・(岩波書店・1981)
20. R. Gustilo : Fractures and Dislocations. Vol. 2, (Mosby,1993)
21. Robert Jordan Schultz : The Language of Fractures.(William-Wilkins,1972)
22. Bernfried Leiber : Wörterbuch der Klinischen Syndrome.(Urban-Schwarzenberg,1959)
23. Webster's Encyclopedic Unabridged Dictionary of the English Language.(Gramerey Books,1996)
24. Edited by J.Gardner et al. : The History Today, Companion to British History. (Collins & Brown,1995)
25. 最新名曲解説全集・第19巻・「歌劇Ⅱ」(音楽之友社・昭55)

お知らせ

「第2回癒しと安らぎの環境賞」募集

医療施設が美術や音楽等のアートを取り入れ、患者さんにとって癒しと安らぎの場になることを願い「癒しと安らぎの環境フォーラム」が昨年から設置されております。

第2回の同賞が下記のとおり募集されておりますのでお知らせいたします。

記

対　　象：病院、クリニック、ホスピス、介護保険施設（自薦、他薦問わず）
顕　　彰：上記各部門賞、食部門特別賞
応募方法：所定用紙利用。用紙と詳細は下記連絡先またはホームページへ。
締　　切：7月31日㈭

連 絡 先：「癒しと安らぎの環境フォーラム」実行委員会
東京都築地2－7－12
TEL 03-3549-2452　FAX 03-3549-1645
HP http://www.iyashitoyasuragi.gr.jp
E-mail：info@iyashitoyasuragi.gr.jp